

# 明治初期の肥前地域における藩札整理状況

——旧佐賀藩札を中心として——

長 野 暹

## 目 次

- 一 はじめに
- 二 新貨幣と藩札の交換状況
- 三 租税上納、貸付金返済などによる藩札回収の様相
- 四 むすびにかえて

## 一 はじめに

明治初年における肥前地域の藩札について、これまで若干検討してきた。<sup>(1)</sup>一八六九年には大量の金札が佐賀藩で発行され、また、それまで藩札の発行を行っていなかった小城藩も金札を発行した。これらは戊辰戦争に伴う戦費の調達と財政補填のために行われたが、それは藩財政の破綻の現われでもあった。

維新政府にとっては、膨大な藩札の整理が統一的貨幣制度を樹立する上で欠かせないことであつた。新貨条例を

制定して統一的貨幣制度を打ち出したが、これには太政官札や藩札などを回収することが欠かせなかった。なかでも藩札は藩割拠体制の象徴的なものであり、この整理なしには統一的行政体制が容易に実態化しなかった。廃藩置県に際して、政府は藩札の回収政策として廃藩時の藩札価格を新貨との交換比価とする方針を出したが、これは銀札発行地域では種々な混乱を伴った。この点については若干考察したので、本稿では、交換比価の決定以後における状況について検討してみよう。これについては、藩札と新貨との交換状況の解明が主になるので、まずこの点について考察しよう。また、藩札の回収は新貨との交換だけでなく、租税上納や貸付金返済、不用官有物払下代金取立などによっても行われたので、この点についても考察しておこう。なお、新貨との交換においては、藩札で新貨一厘以上五銭未満のものは押印で済まし、後日新貨と交換する政策を政府はとった。それゆえ押印状況の検討も必要であろう。

注(1)(2) 拙稿「明治初年の藩札の一考察——肥前地域について——」〔佐賀大学経済論集〕第二十三巻二号、一九九〇年七月、同「明治初期における藩札整理の一考察——交換比価決定の模様——」〔佐賀大学経済論集〕第二十三巻三号、一九九〇年十一月

## 二 新貨幣と藩札の交換状況

旧藩札と新札との交換は一八七三年三月一日から四月十七日までに行われている。『旧藩之紙幣交換ニ付テ諸費御下渡願』には、次のようにある。

金五千八百九拾九円四拾八銭四厘

右之通明治六年三月一日ヨリ同四月十七日マテ旧藩之製造紙幣交換ニ付、紙幣検査并押印焼却等之諸費繰換相渡

置別紙明細帳之通相違無之候条、右金印下渡被下度候也

明治六年五月廿三日

佐賀県七等出仕 中山平四郎

佐賀県權參事 笠 貞繼

佐賀県參事 石井邦猷

大藏省事務總裁

參議大隈重信殿

交換が済み、その費用五八九九円余の下付を五月二十三日に願ひ出ているが、交換期間を三月一日から四月十七日であつた旨を記している。しかし、この交換がどのように行われたかに関する史料は少ない。これは一八七四年の「佐賀の役」が影響しているようである。

一八七四年二月の「佐賀の役」は、佐賀県内に大きな影響を与えたが、県庁も戦乱場になったことから書類は散逸した。政府の藩札交換状況の報告指示に対して、紙幣寮に「旧藩製造紙幣押印済員数書類御下渡之義ニ付願」として、次のような書類を提出している。

旧藩製造紙幣之内、新貨価五錢未満厘以上押印之上再発行之分諸上納之廉江收入之分も其俟上納可取計、尤管下小名之札稀少ニ而人民日用取遣上ニ於テ差支候様ニ而も不都合ニ付、其辺注意管下景況ニ寄、銀銅貨并新札等之内ヲ以御引替之御趣意ニ付、右之分も尚取調上申候様御布達之处、当縣之義も先般賊徒暴挙之節帳簿紛失、右員数等難取調候間、先般検査權助中村義心当県出張之節、押印員数并其後願済押印之分共指出置いニ付、貴御寮江御控書類可有之候間、其地当縣出張所詰官員差出候ニ付、暫時御下渡御座候様、此度左候得も写取、縣地江差廻次第右見込之上、本省へ上申可仕心得ニ付、此段奉願候也

これは一八七四年五月四日付の書類である。藩札交換で一厘以上五銭未満に相当する藩札に押印し再発行がなされたが、この書類の提出が求められたことに言及しながら、この書類は「佐賀の役」の戦乱によって紛失しているとし、検査官が来県した折に提出した書類を写し取り、それを上申したいとしている。「佐賀の役」によって関係書類が散逸していることが窺える。

佐賀藩札と新貨の交換は一八七三年三月一日より四月十七日まで行われたが、その間の状況を綴った書類が「佐賀の役」によって失われたことは、前記紙幣寮への願いにも出ているが、一八七四年六月の「紙幣交換之義ニ付上申」とする紙幣寮への書類にも次のように記されている。<sup>(2)</sup>

当県所轄旧藩造紙幣交換押印取行候場所始卒業之月日并取扱人名五銭未満厘以上押印流通内譯書可差出旨御達ニ付、精々取調候得共、本年二月暴挙之節、諸帳簿紛乱何分調方行届兼候、尤旧藩之紙幣交換調書并御買上調書之内へ交換押印流通高各種仕訳始卒業月日并追引換等詳細書載致、明治六年七八月頃両度ニ大蔵省へ進達致置り趣候間、右帳簿写取之義、先般東京出張詰官員共へ申遣置候ニ付、出来次第右帳簿ニ基キ夫々調査之上可申上候得共、不取敢比段申上り也

「佐賀の役」によって帳簿が紛失したとしているが、一八七三年七、八月頃には藩札交換押印取り扱い場所、交換期間、取り扱い人名、五銭未満押印内訳書などを大蔵省に提出したとある。これによれば藩札と新貨との交換に関して詳細な書類が大蔵省に提出されたとみられる。佐賀県は政府の指示に基づいて藩札の整理を進めていたことが、ここにも出ている。

このように、佐賀県内の藩札と新貨との交換状況に関する書類は「佐賀の役」で紛失し、そのための交換状況は必ずしも明らかにできないが、以下若干の検討をしておこう。

ところで、さきに藩札のうちで、二朱、一朱の小額札は流通度が高く、摩滅し損耗していたので、この分を新札

明治初期の肥前地域における藩札整理状況

表 1 元佐賀藩製造金預札貳朱壹朱損札引換調

(明治 6 年 2 月)

交 換 額	内 訳	交 換 額	内 訳
1, 金9,779両 1 分 内 貳朱札68,143枚 壹朱札20,182枚 外 贋札 8 両10朱 内 貳朱札61枚 壹朱札 7 枚	右ハ於佐賀壬申11月 朔日ヨリ同12月朔日 迄引換高	1, 金333両 2 分 2 朱 内 貳朱札2,376枚 壹朱札382枚 外 贋札 6 両 1 分 内 貳朱札49枚 壹朱札 2 枚	右ハ藤津郡於塩田壬 申11月 6 日ヨリ同 8 日迄引換高
1, 金188両 1 分 1 朱 内 貳朱札1,231枚 壹朱札551枚 外 贋札 3 天 1 朱 内 貳朱札24枚 壹朱札 1 枚	右ハ神埼郡目達原ニ オキテ壬申11月朔日 ヨリ同 3 日迄引換高	1. 金1,101両 2 朱 内 貳朱札7,183枚 壹朱札3,252枚 内 貳朱札70,933枚 壹朱札24,567枚 外 贋札18両 3 分 3 朱 内 貳朱札145枚 壹朱札13枚	右ハ松浦郡伊万里ニ オキテ壬申11月10日 ヨリ同12日迄引換高     右ハ贋札ニ付断裁ニ 付ス

注「官省違達」(明治六年自一月到二月 第十号)より作成。

と引き換えることにしたが、これについては一八七三年二月には引き換えが終っている。大蔵省へ届け出る案が次のように作成されている。

大蔵省江願案伺

元佐賀藩製造預金札貳朱壹朱之内、損札之分引換方及施行以外、別紙之通引換金高壹万四千四百貳貳朱之外ニ贋札八両三步三朱も有之い付、右贋札之分ハ断裁ニ致シ、引換札之義ハ去ル一月御布告之旨ニ依り御省官員追々当県出張之上相納可申候、因テ引換ニ付而之諸費金五千貳円九拾五錢御下渡被下度、入費小訳帳相添此段奉願候也

表2 元佐賀藩製造金銀札引替入費小訳

引 換 人	引 換 場 所	引 換 期 間	引 換 賃
中元寺辰一郎 佐賀商人 内野伊三郎 同 上	神埼郡目達原	壬申10月30日 ～同11月4日	6円25銭（1人当1日62銭 5厘）
中元寺辰一郎 同 上 内野伊三郎 同 上	藤津郡塩田， 松浦郡伊万里	壬申11月5日 ～同14日	12円50銭（同 上）
亀川八兵衛 日達原商人	同 上	壬申11月1日 ～同3日	2円（宿 賃）
光武徳次郎 塩田商人	同 上	壬申11月6日 ～同8日	2円（同 上）
松尾嘉十 伊万里商人	同 上	壬申11月10日 ～同12日	2円（同 上）
中元寺伊吉郎 佐賀商人 小田庄蔵 同 上	同 上	壬申11月1日 ～同12月1日	15円（1人当1円25銭）
中元寺辰一郎 佐賀商人	同 上	30日	7円30銭（宿賃30日分1日 宛25銭）
松尾貞吉 伊万里商人	同 上		5円70銭

注「官省進達」（明治六年自一月到二月 第十号）より作成。

明治六年二月

井上ニ当ル

佐賀県参事 石井邦猷

とある。二朱、一朱金のうち一万四〇二両余が引き換えられた旨を記している。また贋札も八両余り出ている。

旧藩札の引き換えは商人を用いて行われたが、二朱、一朱札の引換状況をみると表1、2のようである。引換額九万一四〇二両二分であるが、このうち九七七九両は佐賀城下町で一九八七年十一月一日から同年十二月一日までの期間に引き換えられている。殆んどが佐賀城下町での引き換えである。しかし、神埼郡目達原、藤津郡塩田、松浦郡伊万里でも引き換えられており、佐賀藩領内に二朱、一朱の小額藩札が流通していたことが窺える。なかでも伊万里で一〇一両の引き換えて総額の一〇%相当になっていることは、伊万里が陶磁器流通の移出入地であったことが反映している。小額藩札の流通が全領域内で行われていたことは、藩札が日常生活の中に大きな位置を占めていたことを

示すものであろう。引換業務は商人が行っており、表2のような内容であった。神埼郡目達原には佐賀商人、藤津郡塩田、松浦郡伊万里には佐賀商人と地元商人が引き換えに従事している。期間は一八七二年十一月中であった。

二朱、一朱の小額札の引き換えは、佐賀県下四か所で行われている。その内訳は表2にあったように、旧佐賀城下町、神埼郡目達原、藤津郡塩田、松浦郡伊万里で引き換えが行われていた。旧佐賀城下町では一八七二年十一月一日から十二月一日までであり、一か月間にわたっている。佐賀本藩の中心地であり、政治の中心地であったことから引き換え額も九七七九両と全引き換え額の九割近くがこで行われている。式朱札六万八千四三枚、壹朱札二万一千八二枚と枚数においても多い。次いで多いのが伊万里である。陶磁器輸出港であったことから経済金融活動も活発であった。引き換え額一一〇一両で式朱札七千八百三枚、壹朱札三千二百五二枚とある。旧佐賀城下町ほどでないが比較的引き換え量も多い。塩田は佐賀藩支藩の蓮池藩領にあり、長崎街道の宿場や河港として栄えていた。このことから塩田が引き換え場所として選定されたとみれる。ここにおいては、三三三両、式朱札二千七百六枚、壹朱札五千八百二枚が引き換えられている。伊万里の三分の一ほどであるが、これは経済力を反映したものである。目達原は長崎街道の目達原宿があったことから引き換え場所となったとみれる。しかし、ここでの引き換え額は少なくて一八八両であり、式朱札一千二百三一枚、壹朱札五百五一枚である。伊万里・塩田・目達原では、引き換え期間は二三日であり、佐賀の一月間と比べると短い。以上のことからして、旧佐賀城下町が貨幣流通の中軸であったことが窺える。

ところで、この引き換え業務に従事した者は表2にあったように、いずれも商人であり、佐賀商人が中心になっている。中元寺伊吉二郎、山田庄蔵、中元寺辰一郎が佐賀では一か月間引き換え業務に携わり、中元寺辰一郎と内野伊三郎は目達原、塩田、伊万里に出張している。引き換え場所は「引換所申付候ニ付宿賃<sup>3</sup>」と目達原商人亀川八兵衛について記されており、商人宅で行われている。塩田では塩田商人光武徳次郎、伊万里では伊万里商人松尾嘉十宅が引換所となっている。引換賃金は「賃金一日一人六十二錢五厘宛<sup>6</sup>」とある。この頃の米価は十一月初旬で佐賀

が一石につき上米二円七二銭七厘、中米二円六八銭、下米二円六四銭であり、ほぼ米四斗に相当した。

このように損耗札と磨滅札の引き換えが行われたが、小額藩札なかでも一朱札、二朱札と交換の損耗度の強いものの交換がまず行われたのは、この種の札の使用頻度が高かったことと、その頻度に耐えるだけの質でなかったことに由来する。預金札が如何に急造品であり、まさしく財政補填的に製造されたかを反映している。これは他面からみれば、藩札が旧佐賀藩領域内では基軸通貨として流通していたことを示している。日常生活においては、銭貨よりも藩札が人々の間では運用されていたことがここにも出ている。銭相場がないと佐賀県は銀札と新貨の交換比価設定で申し出てたが、これは小額藩札の流通状況からしても根拠のある主張であつた。

一八七二年十月二日に佐賀県は藩札に押印する押印章の下付を願ひ出た。

#### 印章御下渡願

藩札押印章三十五顆

#### 此譯

三匁札 新貨四錢四厘  
一毛二余二当ル 貳匁札 壹匁札 八分札 五分札 三分札 二分札 一匁七種

右藩造楮幣之内、新貨五錢未満小札押印用一種五顆宛被相渡旨御達ニ付、書載之通元佐賀藩之分御渡可有之候也

壬申十月二日

佐賀県權參事伴正臣（印）

#### 井上大蔵太輔殿

藩札押印によって新貨流通の促進を計ったが、これは三匁札が新貨で四錢四厘一毛一余という比価である。三匁札を新貨四錢として實際は押印をした。一匁が一錢七厘七毛に相当するが、二匁札以下もこの比価で押印が進められている。

佐賀県は一八七三年一月に新貨五錢未満の押印のための印章の下付を「印章御下渡願」と題する書類を提出した。



次のようである。<sup>(9)</sup>

元佐賀藩札新貨五銭未滿押印之分

三匁札 貳匁札 壹匁札 八分札 五分札 三分札 貳分札

元唐津藩札右同之分

四匁札 貳匁札 壹匁札 五分札 五分五厘札

元小城藩札右同之分

半朱札

右之通藩造楮幣小札押印用兼而御達通り一種五顆宛御渡可被下候、以上

明治六年一月

佐賀県權參事笠貞繼

井上大藏大輔殿

佐賀藩関係では三匁札から二分札まで七種、唐津藩は四匁札から五厘札まで六種、小城藩は半朱札一種の押印章を必要とした。新貨との引き換え準備が着々と進められている。

一八七三年一月二十五日に佐賀県權參事笠貞繼は芳川紙幣頭に新札三十万円の受取証を提出している。<sup>(10)</sup>これゆえ、佐賀県には新札三十万円が引き換え用として下付されたことが窺える。

新貨比較で五銭未滿の札には押印し通用さすようにしたが、この藩札が膨大であったため押印用具が不足を来たし、佐賀県は四月十五日に押印用具の追加下付を願ひ出た。<sup>(11)</sup>

印章御下渡ニ付願

旧藩札五銭未滿之小札押印章拾五顆宛最前御下渡相成ひ得共、多分之小札ニ而押方果敢取不申、夫々為小札流融相付兼、民間日用取遣方難渋可致義ニ付、今亦左之通印章御下渡被下度候

表 3 旧藩札交換出張箇所并取扱官員名書

出張所名	出張期間	出張官員
長崎県管轄 肥前国高来郡 諫 早	3月12日より同月17日迄	15等出仕 内田雅智, 同 大島弥平
〃 同国同郡 神 代	3月8日より同月10日迄	〃 〃 〃
〃 同国彼杵郡 矢 上	3月19日より同月24日迄	〃 〃 〃
佐賀県管轄 第5大区1小区 日達原 肥前国三根郡	3月8日より同19日迄	15等出仕 東島平福, 同 松尾和兵衛
〃 第13大区1小区 早津江 同国佐賀郡	4月1日より同12日迄 3月21日より同30日迄	〃 〃 〃 〃 〃 〃
佐賀県管轄 第12大区1大区 三反田 同国佐賀郡	3月8日より同13日迄 4月11日より同16日迄	15等出仕 諸隈宣義, 同 槇雄助
〃 第35大区4小区 伊万里 肥前国松浦郡	3月8日より同14日迄 4月6日より同13日迄	〃 〃 〃
〃 第33大区2小区 武 雄 同国杵島郡	3月16日より4月4日迄	〃 〃 〃
〃 第39大区1小区 鹿 島 同国藤津郡	3月8日より同15日迄 3月28日より4月4日迄	15等出仕 野口高康, 同 平方善次
〃 第38大区1小区 塩 田 同国同郡	4月6日より同17日迄	〃 〃 〃
〃 同区 嬉 野 同国同郡	9月17日より同26日迄	〃 〃 〃
〃 第29大区2小区 唐 津 肥前同松浦郡	3月12日より4月5日迄	15年出仕 上野敬次郎, 同 久米辰助
〃 第8大区3小区 佐 賀 同国佐賀郡 呉服町	3月1日より4月17日迄	15年出仕 上山与助, 同 立川清助
〃 同区 佐 賀 同区同郡 元 町	3月30日より4月17日迄	15年出仕 内田雅助, 同 大島弥平

注「官省進達」(「明治六癸酉五月ヨリ六月迄」)より作成。

- ・但唐津藩札5銭未満之分押取日程＝3月12日より始業, 4月13日卒業唐津交換所押印
- ・旧佐賀藩札五銭未満之分押印日程＝3月28日より始業, 5月3日卒業, 佐賀押印

明治初期の肥前地域における藩札整理状況

表 4 肥前国旧佐賀・小城・唐津各藩札交換并押印焼却等係入費勘定

(明治6年3月1日から同年4月17日まで)

1. 金5,977円16銭3厘	遺 払 高 内 訳
此訳 金1,341円16銭2厘 内 金1,211円4銭 金30円12銭2厘	押印入費  是ハ押印札数7,976,606枚ニ相掛候、職工給料別紙請取証書之通相渡如斯  是ハ朱肉及属品小買物諸入費別紙請取証書之通相渡如斯
金1,731円20銭1厘 内 金83円20銭6厘 金1,038円55銭7厘 金400円 金186円18銭 金319円25銭8厘	御引換入費  是ハ55,470円96銭7厘ニ相掛候請負給別紙受取証書之候相渡如斯  是ハ引換場札見調ニ付雇ノ者給料別紙請取証書之通相渡如斯  是ハ交換并押印場3ヶ所仮官舎借料別紙受取証書之通相渡如斯  是ハ右日数小買物諸入費別紙受取証書之通相渡如斯  是ハ交換高638,517円1銭9厘ニ相掛候掛屋手数料千円ニ付50銭宛別紙受取証書之通相渡如斯
金1,201円91銭2厘 内 金265円58銭3厘 金816円38銭6厘 金119円96銭3厘	諸運送并焼捨入費  是ハ焼捨釜2ヶ所築立囲柵取建外諸入費別紙受取証書之通相渡如斯  是ハ元金東京偕又肥後熊本ヨリ佐賀迄運輸費并交換残金検査官員派出向福岡県迄同別紙受取証書之通相渡如斯  是ハ伊万里其外各所運輸費別紙受取証書之通相渡如斯

注「官省進達」(明治六癸酉五六月)より作成。

一四錢印章 拾顆

一式錢七厘同 拾顆

一毫錢三厘同 拾顆

右之通奉願候也

明治六年四月十五日

井上大藏大輔殿

佐賀県参事石井邦猷

と四錢、二錢、一錢の押印用印章の下付を願ひ出ている。この願ひに対しては「彫刻出来次第下渡可申事<sup>⑩</sup>」と四月二十八日に大藏大輔井上馨名で回答している。小額札の押印が進められているが、実際には佐賀県での押印の方が早く進められ、五月二十三日には押印用印章の下付でなく、押印終了の届けを出している。

佐賀藩札と新貨との交換は一八七三年三月一日から同年四月十七日までに行われたが、その間の状況について、交換に際して県官が出張した日程と場所からまず検討しておこう。表3にあるように、諫早、神代<sup>うんど</sup>、矢上、目達原、早津江、三反田、伊万里、武雄、鹿島、嬉野、唐津、佐賀旧城下町で交換が行われ、そこに県官が出張している。

出張期間からみて、三月一日から四月十七日までの間に交換が行われたことが窺える。出張場所の点では、旧佐賀藩領の主要な所で交換が行われたことが知れる。諫早は藩制期には佐賀鍋島藩の親類同格であった諫早氏の居所があつた所であり、神代は佐賀藩家老格の神代鍋島氏の館所在地であつた。矢上は藩制期には佐賀藩の諫早氏の所領であり、長崎の玄関口として重きをなしていた。目達原は長崎街道の宿があつた所であり、早津江は藩制期に港町として栄えた所であつた。また、三反田は山内郷の交通の要衝で、藩制初期には代官所が置かれた所であり、伊万里、武雄、鹿島、嬉野、唐津は藩制期において重要な地域であつた。

次に藩札交換経費から、交換の様相を検討しておこう。

のための官員派遣費用として「御引換元金受取トシテ肥後熊本ヨリ佐賀迄往返旅費」がそれぞれ計上されていることに出ている。これら諸費の裏付けとなる書類が表5のように作成されている。「押印職工給料請取証」、「交換受負給料請取証」、「掛屋手数料請取証」、「焼却釜築立其外入費受取証」などが作成されており、押印と交換が行われ、その事務的処理も進められたことが、これから窺える。

交換受請人に関する史料が不明のため明らかでないが、受請人は各地の有力商人であったことは、さきの押印状況から推測される。

表 5 交換費用御勘定帳証書目録

- |                                 |
|---------------------------------|
| 1. 押印職工給料請取証 1 冊                |
| 1. 朱肉属品小買物諸入費請取証 1 冊            |
| 1. 交換受負給料請取証 1 冊                |
| 1. 交換上り札見調ニ付雇給料受取証 1 冊          |
| 1. 仮官舎借料請取証 1 冊                 |
| 1. 小買物代請取証 1 冊                  |
| 1. 掛屋手数料請取証 1 冊                 |
| 1. 焼却築業立其外入費受取証 1 冊             |
| 1. 元金東京及肥後熊本ヨリ運送人足員其外諸入費受取証 1 冊 |
| 1. 伊万里其外各所運送人足員受取証 1 冊          |
| 1. 元金請取ニ付旅費渡帳 1 帳               |
| 1. 各所出張旅費日当渡帳 1 冊               |
| 1. 唐津其外出出張請入費受取証 1 冊            |
| 1. 元佐賀藩製造金預式朱一朱損札引替入費帳 1 冊      |

注「官省進達」(明治六癸酉 5 月ヨリ六月迄)より作成。

表 4 は、佐賀、小城、唐津各藩札の交換、押印、焼却に要した経費の内訳である。五九七七円余が入費したとあるが、このうち、一三四一円は押印入費であり、押印枚数は七九七万六六〇六枚に及んでいる。膨大な押印数である。また、藩札の交換高は六三万八五一七円余であり、多額の藩札が新札と交換されている。交換に際しては交換を請負った掛屋に千円につき五〇銭の手数料が支払われていることから、各地の有力商人がこの交換業務に対応したものとみなされる。交換された藩札は焼却されたことが、「焼却釜ニケ所築立」の費用として二六五円計上されていることから窺える。

また、新札は東京と熊本から受け取っていることが「元金東京偕又肥後熊本ヨリ佐賀迄運輸費」が出され、こ

表 6 元佐賀藩製造紙幣之内五銭以下壹厘以上押印済内訳

枚 数	金 額
1, 札数7,953,696枚 内 札数1,658,737枚	銀札 此新貨66,349円48銭 但 1 枚銀 3 匁 = 4 銭
〃 1,581,819枚	〃 42,709円11銭 3 厘 〃 銀 2 匁 = 7 厘
〃 1,909,656枚	〃 24,825円52銭 8 厘 〃 銀 1 匁 = 1 銭 3 厘
〃 1,741,800枚	〃 12,192円60銭 〃 銀 5 分 = 7 厘
〃 1,061,684枚	〃 4,246円73銭 6 厘 〃 銀 3 分 = 4 厘

注「官省違達」(明治六年癸酉五月ヨリ六月迄)より作成。

佐賀県においては、このように三月一日から四月十七日までの間に押印と交換が行われ押印枚数は七九七万六六〇六枚に及び、また、交換高も六三万八五一七円に達している。

一八七三年五月に佐賀県は大蔵省事務総裁の参議大隈重信に藩札交換などに伴う財政事務のために十五等出仕十一名を増員することを求めた「旧藩札交換ニ付官員増員御届」と題した書類を提出した。次のような内容である。<sup>(10)</sup>

旧藩製造紙幣当三月一日ヨリ四月十七日マテ交換及施行候処、其頃辛未歳入出壬申歳出并同年十月十一月、庁費取調会同前差出候半而不叶ニ付、右件々取纏中ニテ在務ノ官員ニテ交換事務相整兼候ニ付、各所引換方派出之為メ十五等出仕拾一名右交換期限中一時増員取計候処御聞置被下度、此段御届仕候也

明治六年五月

佐賀県七等出仕 中山平四郎

佐賀県權参事 笠 貞継

佐賀県参事 石井邦猷

大蔵省事務総裁

参議大隈重信殿

これによれば藩札交換事務のために、一八七一、七二年の県の歳入出、同年十月、十一月の庁費の取調べ事務が停滞していることが分かる。藩札交換に佐賀県庁の係員が忙殺されていることが窺われる。

さきに、交換高は七六万三〇〇四円とみたが、実際の交換高は六五万八五一七円であり、約一一万円ほどが交換されていないことになるが、約八五%の交換がなされたことになる。基本的には三月一日から四月十七日までの交換で藩札と新札との交換は順調になされたとみれる。

五銭以下の押印の状況を検討しておこう。佐賀藩札のみの押印枚数は、表6のようである。押印枚数は七九五万三六九六枚に達するが、三匁札が一六五万八千枚、二匁札一五八万枚、一匁札一九〇万九千枚、五分札一七四万枚、三分札一〇六万枚とあり、三分札を除き、一五〇万枚から一九〇万枚代の各種銀札が回収されている。膨大な銀札が交換によって回収されたことが窺える。

注(1) 「官省進達」明治六年癸酉五月ヨリ六月迄第二百三十号。

(2) 同右、明治七年自一月到六月第百十八号。

(3) 同。

(4) 「官省進達」明治六年自一月到六月第四十五号。

(5) 「諸願伺書控」明治六年一月ヨリ六月迄。

(6) 同。

(7) 同。

(8) 「官省進達」明治五年十一月分。

(9) 「諸願伺書控」明治六年一月ヨリ六月迄。

(10) 同右、明治六年一月ヨリ二月迄。

(11) 「官省進達」明治六年癸酉三月四月分。

(9) 同。

(10) 「官省進達」明治六年癸酉五月ヨリ六月迄。

表 7 壬申租税雑税納仕訳書

額	内 訳
1. 米147,465石 1. 金54,020円85銭2厘	
内 金343,815円59銭1厘	是ハ兼々目安ヲ以当五月上納ノ分
此内 金127,831円26銭9厘 金31,411円76銭 金35,661円31銭4厘 金10,193円26銭7厘 金49,241円85銭3厘	是ハ石代上納一月分ノ内、旧藩札中村検査権助 受取証書ヲ以五月上納 是ハ石代二、三月分ノ内旧藩札中村検査権助受 取証書ヲ以五月上納 是ハ壬申新税旧藩札中村検査権助受取証書ヲ以 当五月上納ノ分 是ハ諸品払下代、旧藩札五月上納ノ分 是ハ諸品払下代、旧藩札中村検査権助請取証書 を以当五月上納

注「官省進達」(明治六年自九月到十月)より作成。

### 三 租税上納、貸付金返済などによる 藩札回収の様相

租税上納などでは、明治五年段階では旧藩札が使われていた。「石代雑税上納之義ニ付御届」として

一金貳拾貳万四千八百三拾壹円貳拾六銭九厘

是ハ石代五分、一月三十一日限旧藩札ニ而村より納

金

一金拾壹万八千九百八拾四円三拾貳銭貳厘

是ハ三月石代貳分五厘村より納金并五月石代前金入テ

小以金三拾四万三千八百拾五円五拾九銭壹厘

とある。二二万四八三一円が藩札で上納されており、石代納が藩札によって行われている。藩札整理が石代納を推進しているともみれる内容であり、藩札の回収が進んでいる。

藩札の回収は租税の石代納によっても進められた。この様相を検討しておこう。

一八七二年の正租と雑税の納入内訳をみれば、表7のようである。米一四万七四六五石、金五万四二〇円八五銭二厘が納められているが、この租税金のうち三四万三八一五円五九銭



一厘は「是ハ廉々目安ヲ以当五月上納ノ分」であり、これらが藩札であることは、内訳において「是ハ石代上納一月分ノ内、旧藩札中村検査權助受取証書ヲ以テ五月納」などといずれも旧藩札での上納であることを記していることから窺える。三四万三八一五円五九銭一厘の内容を若干検討しておこう。

表8には、表7の一二万七八三一円二六銭九厘の内訳であるが、佐賀藩、小城藩、唐津藩、厳原藩田代札、同浜崎札で上納されていることが分かる。この中で佐賀藩札が一〇万八五〇七円余で、上納金の八四%が佐賀藩札での上納となっている。佐賀藩札の発行額の多さが窺える。佐賀藩札の中でも金札は一〇万二〇九九円で、銀札は六四〇八円に過ぎない。それゆえ、租税などにおいては、銀札よりも金札で主に上納されていることが判明する。

石代納上納金の二、三月分の三万一四一一円七六銭の内訳をみれば、表9のようである。ここでも上納金の七四%は佐賀藩札である。この場合は銀札が一萬五八九四円余、金札が七三六一円余で銀札の方が多い。小城藩札での支払いもある。一方、官有物の払下げに伴う代金でも藩札が用いられている。「諸品払下代五月上納ノ分」の内訳をみれば、表10のようである。佐賀藩、唐津藩、厳原藩田代、同浜崎の藩札で上納されている。また表7にある四万九二四一円余の諸品払下代の上納にも藩札が用いられており、銀札三三四八貫四四六匁、枚数二九万三九一七枚が、この上納によって回収されている。

県庁において収入された貨幣のなかでも、藩札が主体になっていた。「庚午ヨリ引送米金并貸附返上金正雜税金等辛未収入高ノ内、四県ニテ遣払成金引付ノ内上納ノ分」とあるものの内訳を示すと、表11のようである。唐津県、厳原県、小城県、鹿島県の四県の遣払残金上納分をみれば、藩札、金札、正金、証券とある中で藩札の占める割合が高い。唐津県においては、藩札三〇一二両で正金二九九七両と正金が比較的多いが、厳原県、小城県では殆んどが藩札である。一方、鹿島県では旧鹿島藩の時には藩札が発行されていなかったため、藩札は計上されていない。これらからしても藩札が県庁にかなり収納されていることが分かる。

表 8 壬申石代納金当一月上納内訳

金 額	内 訳
金127,831円26銭 9 厘	
内 旧佐賀藩札 金札102,099円 永375匁	此新貨102,094円89銭 9 厘 内 2 分札=50銭=103,037枚 此新貨51,518円50銭 1 分札=25銭=71,230枚     〃   42,807円50銭 2 朱札=12銭 5 厘=57,711枚     〃   7,213円87銭 5 厘 1 朱札= 6 銭 2 厘=8,952枚     〃   555円 2 銭 4 厘
旧小城藩札 金札6,342両 永406文 3 分	此新貨6,338円 8 銭 4 厘 内 2 分札=50銭=5,900枚 此新貨2,950円 1 分札=25銭=7,156枚     〃   1,789円 2 朱札=12銭 5 厘=8,505枚     〃   1,063円12銭 5 厘 1 朱札= 6 銭 2 厘=7,568枚     〃   469円21銭 6 厘 半朱札=3銭 1 厘=2,153枚     〃   66円74銭 3 厘
旧佐賀藩札 銀札478貫301匁 5 分	此新貨6,408円40銭 内 15匁札=20銭=840枚 此新貨=160円 10分札=13銭 4 厘=43,000枚     〃   5,762円 5 匁札= 6 銭 7 厘=7,140枚     〃   478円38銭 3 分札= 4 厘= 5 枚     〃   2 銭
旧唐津藩札 錢札117貫986匁	此新貨982円59銭 2 厘
	内 20目札=16銭 7 厘=2,236枚 此新貨372円41銭 2 厘 10匁札= 8 銭 3 厘=5,621枚     〃   466円54銭 3 厘 8 匁札= 6 銭 7 厘=511枚     〃   101円23銭 7 厘 6 匁札= 5 銭=828枚     〃   41円銭

注「官省進達」(明治六年癸酉七月八月份)より作成。

明治初期の肥前地域における藩札整理状況

表 9 壬申石代納金当二，三月上納内訳

金 額	内 訳
金31,411円76銭	
内 旧佐賀藩札 金札7,362両永812文 5 分	此新貨7,361円98銭 9 厘  内 2 分札=50銭=8,655枚 此新貨4,327円50銭 1 分札=25銭=6,851枚     〃   1,712円75銭 2 朱札=12銭 5 厘=9,757枚   〃   1,219円62銭 5 厘 1 朱札= 6 銭 2 厘=1,647枚   〃   202円11銭 4 厘
旧小城藩札 金札6,266両永812文 5 分	此新貨6,262円84銭 6 厘  内 2 分札=50銭6,969枚 此新貨3,484円50銭 1 分札=25銭=5,354枚     〃   1,338円50銭 2 朱札=12銭 5 厘=27,584枚   〃   948円 1 朱札= 6 銭 2 厘=6,522枚   〃   404円36銭 4 厘 半朱札= 3 銭 1 厘=2,822枚   〃   87円48銭 2 厘
旧佐賀藩札 銀札1,190両156文 6 分	此新貨15,894円56銭 5 厘  内 20匁札=26銭 7 厘=50,350枚 此新貨13,443円45銭 15匁札=20銭=2,500枚     〃   500円 10匁札=13銭 4 厘=5,501枚   〃   737円13銭 4 厘 8 匁札=10銭 7 厘=4,001枚   〃   428円10銭 7 厘 5 匁札= 6 銭 7 厘=8,203枚   〃   549円60銭 1 厘 3 匁札= 4 銭=1,660枚     〃   106円64銭 2 匁札= 2 銭 7 厘=2,282枚   〃   61円 4 厘 1 匁札= 1 銭 3 厘=302枚   〃   29円20銭 6 厘 8 分札= 1 銭 1 厘=655枚   〃   7円28銭 5 厘 5 分札= 7 厘=3,240枚     〃   22円68銭 3 分札= 4 厘=1,052枚     〃   8円28銭 8 厘

注「官省違達」(明治六年癸酉七月八分) より作成。

表10 壬申官舎地所竹木不用物払下金之内郷中ヨリ取立分

金 額	内 訳
金10,193円26銭 7 厘	
内 旧佐賀藩札 銀札5,004貫363厘 此金7,417円61銭 3 厘	<p>辛未 7 月14日相場ヲ以取立候分 1 円ニ付68匁</p> <p>内 10匁札=46,306枚 此錢460貫360匁 此金6,769円58銭 3 厘 8 匁札=5,500枚   〃 44貫           〃 647円 5 銭 9 厘 3 匁札= 1 枚       〃 3 匁           〃 4 銭 4 厘 此新貨680円70銭 5 厘</p> <p>内 8 匁札=120枚                   此新貨10円70銭 5 匁札=10,000枚               〃 60,700円 3 分札=1枚                   〃 4 厘</p>
旧唐津藩札 錢札100貫406匁	<p>此金1,045円89銭 5 厘</p> <p>内 20銭札=5,020枚 此錢100貫400匁 此金1,045円83銭 3 厘 6 銭札= 1 枚       〃 6 匁           〃 6 銭 2 厘</p>
旧嚴原藩田代発行札 銀札38貫377匁 5 分	<p>此金255円32銭 2 厘</p> <p>内 10匁札=2,000枚 此銀20貫           此錢209円11銭 2 厘 5 匁札=173枚                   此金11円10銭 3 匁札=1,000枚   〃 30貫           〃 30円 1 匁札=378枚   〃 378匁           〃 5 円 5 分札= 1 枚   〃 5 匁           〃 11銭</p>
旧嚴原藩浜崎発行札 錢札49貫337匁 5 分	<p>此金485円57銭 5 厘</p> <p>内 8 匁札=3,307枚 此錢44貫296匁 此金438円92銭 2 厘 3 匁札=7,639枚   〃 22貫917匁   〃 25円36銭 1 厘 5 分札=4,429枚   〃 2 貫124匁 5 分   〃 21円29銭 2 厘</p>

注「官省進達」(明治六年癸酉七月八月份)より作成。

明治初期の肥前地域における藩札整理状況

表11 上納貨幣内訳

(明治4年)

種類	県	元 唐 津 県	元 厳 原 県		元 小 城 県	元 鹿 島 県
			浜 崎	田 代		
藩 札	札	3,012両 2 分 3 朱	250両	3,187両	3,788両	
金 札	札	240両			475両	3,365両 1 分
正 金	金	2,997両			40両 2 分	246両 1 分
証 券	券	625両				
質 金	金	53両				112両
眞文字小判			528両	2 分 2 銭		
合 金		6,927両 2 分 3 朱	778両	3,187両 2 分 2 銭	4,303両 2 分	3,723両 2 分

注「官省違違」(明治六年癸酉七月八分)より作成。

表12 藩札で新税上納内訳

(明治5年)

<p>藩札897円87銭5厘</p> <p>此札数 2,784枚</p> <p>内</p> <p>2分札 1,200枚</p> <p>1分札 856枚</p> <p>2朱札 624枚</p> <p>1朱札 80枚</p> <p>半朱札 20枚</p>	<p>但価格比較表御渡以前取立仕ニ付、辛未7月14日相場金1円ニ1両替</p> <p>是ハ旧小城県庚午雜税金897円89銭4厘2毛之内大阪銀行証書1枚並仕訳書相添右上納候也</p>
<p>藩札5,750円41銭1厘2毛</p> <p>此摺幣銀 391貫62匁</p> <p>此枚数 79,073枚</p> <p>内</p> <p>20匁札 120枚</p> <p>15匁札 1,200枚</p> <p>10匁札 12,304枚</p> <p>8匁札 3,854枚</p> <p>5匁札 20,200枚</p> <p>3匁札 33,000枚</p> <p>2匁札 8,395枚</p>	<p>旧佐賀藩札</p> <p>但価格比較表御渡以前取立候ニ付辛未7月14日相場金1円ニ付68匁替是ハ辛未酒造税金7,305円、醬油税金190円75銭合金7,501円5銭ノ内</p>

注「官省違違」(明治六年八月九月)より作成。

雑税に關しても藩札で上納されていたが、これをもう少し検討しておこう。表12は一八七二年段階の雑税を藩札で納めた状況の一部を示したものである。藩札で八九七円八七錢五厘が上納された部分をみると、これは旧小城県の雑税金であることが記されており、藩札二七八九枚が回収されている。また、藩札で五七五〇円四一錢一厘の上納内訳では酒造税と醬油税が藩札で納められ、藩札枚数は七万九〇七三枚と可成りの枚数になっている。

石代納金や雑税を藩札で納めることが多いことが、以上の諸例からも窺える。表12にあつたように、藩札の発行がなかつた領域では太政官札や正金で納められているが、藩札の発行地域は殆んどが藩札での上納になっている。それゆえ、これらの地域では租税上納において藩札が用いられ、それによつて藩札の回収が進んでいる。

一八七二年五月段階の雑税上納状況をみれば、表13のようである。

三万五六六一円が上納されているが、佐賀藩は銀札、唐津藩と厳原藩浜崎領は錢札と、それぞれの藩札で雑税が納められている。一八七二年五月なので、佐賀藩の銀札は一元につき六八匁であると算定されている。佐賀藩の場合、二〇匁、一五匁札が多く、雑税上納で主な札となっている。唐津藩と厳原藩の上納額は多くはないが、種別ごとに藩札枚数、金額がまとめられていることは、藩札の処理が鋭意行われていた様相を反映するものである。

旧藩期の貸附金を藩札で回収することを進めているが、これは次のような案文にも出ている。一八七三年十一月に大蔵省紙幣寮<sup>(3)</sup>対して

旧厳原小城両藩貸附金返納之内、同所製造紙幣ヲ以取立候分、壬申十月大坂出張紙幣寮江上納致置候処、本年十一月別紙之通ニテ本納相整候件同所出張紙幣寮江差図ニ依り右請取証ヲ以テ上納仕候也

という文書を出す案文が作成されている。厳原藩と小城藩の貸附金が藩札で回収され、それが紙幣寮に納められていることが分かる。この案文は正式に紙幣寮に提出されたとみられ、一八七四年一月十日付で大蔵卿大隈重信名で、書面旧厳原小城両藩貸下金之内、取立分金六千九百四拾八円八十五錢九厘大坂出張紙幣寮請取証書ヲ以上納之

儀聞届い、尤下渡金取立高人員仕訳書差出可申事

と、六九四八円八五銭九厘が紙幣寮へ納めることを認める旨を伝えている。

旧藩県の折の貸附金の取立分について早急に上納するようことが求められ、往復日数を含めて二〇日以内に取調べ報告することが指示されていたことが記され、それに対して佐賀県は、証文その他の調査や貸附人が数百人に及ぶので指定期日内の報告が困難であるとして延期することの許可を求めている。貸附金の取立について政府は厳しい態度で臨んでいたことが出ている。佐賀県の伺いに対しては、八月二十三日に大蔵大輔井上馨名で次のように認可している。

書面旧藩造紙幣貸附取調猶予之義申出之通聞置候条、右期限迄無相違可申出候、尤証文取揃之義ハ取調伺言上証書引替取計候義と相心得可申事

とある。一方、藩札の回収は貢租金の上納などによっても進められたが、官有物の払下げ代金の上納も藩札ですることが認められている。「辛未十月ヨリ壬申九月迄不用物仕払代金上納之義ニ付御届」と題する書類には、次のように記されている。

辛未十月ヨリ壬申九月迄不用物仕払下代金故検査權助中村義心一昨壬申五月中西海道派出之節、旧藩札ヲ以テ金四万貳千七百三十四円八十八銭八厘八毛引渡候受取証書得能紙幣頭受取証ニ引直候ニ付上納仕度、小訳帳并納証共相添此段御届仕候也

明治七年二月五日

佐賀県權令岩村高俊

大蔵卿大隈重信殿

不用官物の払下代金四万二七三四円が藩札で取り立てられていることが記されている。

この状況は一八七九年にも出ている。同年五月に北島佐賀県令は内務卿大久保利通宛に「壬申地所其外払下代金

表13 壬申雜税五月上納内訳

金 額	内 訳
1. 金35,661円31銭4厘	
内 旧佐賀藩札 銀札789貫890匁3分	此金11,616匁3銭3厘(但1円ニ付68匁)
	内 20匁札 = =20,000枚此銀400貫目此金5,882円35銭3厘 15匁札 = =20,000枚 〃 300貫目 〃 441円96銭5厘 10匁札 = =8,964枚 〃 89貫640目 〃 1,318円23銭5厘 5匁札 = =50枚 〃 250目 3円67銭6厘 3匁札 = =1枚 〃 3円 4厘
同藩札 金札868貫665匁	此新貨11,626円23銭1厘
	内 20匁札 = 26銭7厘 = 4,000枚 此新貨1,068円 8匁札 = 10銭7厘 = 4,940枚 〃 5,288円80銭 5匁札 = 6銭7厘 = 78,693枚 〃 5,272円43銭1厘
旧唐津藩札 銭札155貫60目	此金1,615円28銭8厘(1円ニ付96匁)
	内 20匁札 = =7,680枚 此銭153貫600匁 此金1,600円 10匁札 = =146枚 〃 1貫460匁 〃 15円20銭8厘
旧厳原藩浜崎発行札 銭札794貫118匁	此金7,809円20銭3厘(1円ニ付101匁6分9厘)
	内 24匁札 = 2,995枚 此銀 70貫896匁 此金 697円17銭8厘 20匁札 = 40,422枚 〃 408貫440匁 〃 4,016円52銭1厘 10匁札 = 315枚 〃 13貫150匁 〃 129円31銭4厘 5匁札 = 3,800枚 〃 119貫 〃 1,170円22銭3厘 2匁札 = 28,998枚 〃 57貫996匁 〃 570円32銭1厘 1匁札 = 10,331枚 〃 10貫331匁 〃 101円59銭3厘 2分5厘札 = 1,700枚 〃 425匁 〃 4円17銭9厘



明治初期の肥前地域における藩札整理状況

金 額	内 訳
旧蔵原藩札 金札 4,228両永375文	此新貨 1,838円88銭 4 厘 (但金 1 円ニ付36銭) 内 2 分札 = 936枚 此金 468両 此新貨168円48銭 1 分札 = 2,350枚 // 587両 // 211円50銭 1 朱札 = 3,852枚 // 240両 // 86円67銭 2 分札 = 2,463枚 // 1,231両 // 576円34銭 2 厘 1 分札 = 5,541枚 // 1,385両 // 648円29銭 7 厘 1 朱札 = 5,046枚 // 315両 // 147円59銭 5 厘
旧蔵原藩札 銭札 8 貫799匁 5 分	此新貨 48円79銭 4 厘 (金 1 円ニ付36銭) 内 2 匁 5 分札 = 696枚 = 此銭 1 貫10匁 = 此金12両永625文 = 此新貨 4 円54銭 5 厘 1 匁 5 分札 = 169枚 = 此銭253匁 5 分 = 此金 3 両永168文 8 分 = 此新貨 1 円14銭 1 厘 1 匁札 = 505枚 = 此銭505匁 = 此金 6 両永312文 = 此新貨 2 円27銭 2 厘 5 匁札 = 437枚 = 此銭218匁 5 分 = 此金 2 両永731文 = 此新貨98銭 3 厘 2 匁 5 分札 = 696枚 = 此銭 1 貫740匁 = 此金11両永750文 = 此新貨10円17銭 9 厘(金 1 円ニ付46銭 8 厘) 1 匁 5 分札 = 906枚 = 此銭 1 貫359匁 = 此金 6 両永987匁 = 此新貨 7 円95銭 (上同) 1 匁札 = 2,628枚 = 此銭 2 貫628匁 = 此金32両永850文 = 此新貨15円37銭 4 厘 5 分札 = 2,171枚 = 此銭 1 貫85匁 5 分 = 此金13両永56文 = 此新貨 6 円35銭
旧蔵原藩札 銭札21,138貫240文	此新貨1,106円96銭 1 厘 (金 1 円ニ付48銭) 内 96銭10貫文札 = 964枚 = 此銭9,254貫400文 = 此金964両 = 此新貨662円72銭 96銭 2 貫500文札 = 2,547枚 = 此銭6,112貫800文 = 此金636両 = 此新貨305円62銭 96銭625文札 = 2,415枚 = 此銭1,449貫文 = 此金150両 = 此新貨72円45銭 96銭200文札 = 3,223枚 = 此銭318貫816文 = 此金64両 = 此新貨30円52銭 1 厘 96銭100文札 = 3,819枚 = 此銭366貫324文 = 此金38両 = 此新貨18円35銭 1 厘 96銭10貫文札 = 147枚 = 此銭1,411貫200文 = 此金147両 = 此新貨91円72銭 8 厘 (1 円ニ付62銭 4 厘) 96銭 2 貫500文札 = 650枚 = 此銭1,500貫文 = 此銭162両 = 此新貨101円40銭 96銭625文 = 609枚 = 此銭365貫400文 = 此金38両 = 此新貨23円 5 銭 1 厘

注「官省進達」(明治六年癸酉七月八月份)より作成。

上納之義ニ付上申案伺」が作成されている。次のようである。

壬申地所其外入札払下代金上納之義ニ付上申案伺

一昨壬申五月中元中村検査權助西海道派出之節、地所其外入札払下代金貳千百三拾八円三拾貳錢内藩札ヲ以テ引渡候ニ付、右同人受取候証書受取置候処、今般更ニ得能紙幣頭受取証ニ引直シ候ニ付、則上納仕度依而小沢帳相添此段上申候也

とあり、地所其外払下代金二一三八円が藩札でもって納められている。この願いに対して「書面伺之趣聞届候」と一八七九年五月十八日に内務大丞林友幸名で指示が出されている。

官有の地所不用物払下げ代金の上納状況について、若干検討しておこう。

表10は一八七三年の地所不用物払下物代金の上納内訳であつた。佐賀藩では銀札五万貫が一円につき銀六八匁の相場で上納されており、藩札枚数も一〇匁札四万六三〇六枚、八匁札五六〇〇枚、五匁札一万枚とある。また唐津藩では錢札一四九貫が上納され、二〇匁札五〇二〇枚、八匁札三三〇七枚、三匁札七六三九枚、五分札四二四九枚がこれによつて回収されている。嚴原藩田代領では銀札三八貫、四千枚余り回収されている。

一八七三年五月に不用物払下代として佐賀藩関係の取り立分をみれば、表14のようである。

銀札三三四八貫が取り立られ、一五匁札二万九六四八枚、一〇匁札一五万七〇〇〇枚、八匁札九万九一二七枚、五匁札一〇万八一二枚と約三〇万枚の藩札が回収されている。

石代納金や雑税などを藩札で納める場合、藩札と新貨との交換比価が未定の場合は、藩札での上納は、その藩札発行管内に限り認めるという政策をとつた。これは藩札が藩域内での流通ということを前提にしたものであるが、現実には旧藩域を越えて藩札は流通し、また、廃藩置県によつて、旧藩域が分割されたり、統合された場合には各種の藩札が流通するという事態になつていた。このため政府は藩札と新貨との交換比価が定まつた藩札では、租税

明治初期の肥前地域における藩札整理状況

表14 旧佐賀藩札での不用物払下代金納額

(明治6年5月)

銀札3,348貫446匁 辛未7月14日相場を以取立候分 (此金49,241円85銭3厘) = 1円ニ付68匁		
15匁札 = 29,648枚	此銀 = 444貫720目	此金 = 6,540円
10匁札 = 157,000枚	〃 = 1,570貫	〃 = 23,088円23銭5厘
8匁札 = 99,127枚	〃 = 793貫16匁	〃 = 11,662円
5匁札 = 108,142枚	〃 = 540貫790匁	〃 = 7,951円61銭8厘

注「官省進達」(明治六年癸酉七月八月分)より作成。

上納に際しても藩札で上納することを認めた。政府は大蔵大輔井上馨名で「旧各藩札之義ニ付左之通被相達度」として、次の文書を達した。

旧各藩札之義ニ付左之通被相達度

諸県新置ニ付旧藩々管轄地之内両縣ニ引分レ候自從前其地方通用之藩札取扱之儀も辛未七月十四日之相場ヲ以テ双方共交換セシメ、右両県ニ限り公納ニも受取候様可致旨同十二月十四日御布告相成居候処、右も元來其管内限通用之為発行之札ニ而何連も各種相場不同ニ付、前同日之相場新貨価位未定之分錯雜候而も不都合ヲ醸いも必然之義ニ付、公納之義も旧藩管轄地限御差許相成居い処、追々金銀札之相場治定價格比較表相渡新貨与之対価判然相成い、就而も旧藩管轄地江比較表行渡差支筋無之向も、自今新置管轄内ヲ限從前之正別ニ不拘交通通用公納受取不苦候、尤諸県トモ管轄外ハ是迄之通可相心得、且右札ニ關係之事務ハ辛未十二月御布告之通其発行之旧藩庁所属之新県ニ而取扱候義ト可相心得事

一月十日 大蔵大輔井上 馨

これは一八七一年七月十四日付での藩札と新貨との交換比価が定まった地域では租税の上納を藩札であることを認める旨が記されている。

佐賀県は、この達と共に、次の文を添えて管内に布達した。<sup>(9)</sup>

右之通大蔵省ヨリ被相達候ニ付、旧佐賀唐津小城藩札之義ハ既ニ価格表被相渡候ニ付而も、当県管内限り交通公納相用差支無之候条、此段相達候事

但旧佐賀唐津小城藩札ヲ旧厳原藩管内田代浜崎地方ニ於テ通用公納相用差支無之候

得共、田代浜崎札之義ハ末夕価格表相渡無之ニ付、元其管内限通用之義ト可相心得事

佐賀、唐津、小城の藩札は比価表が定まっているので、公納金の藩札での上納は差支えないとしている。ただ旧  
厳原藩田代札と同浜崎札は比価表が出来ていないので、田代札、浜崎札は、その発行管内限りでの上納を認めると  
いう措置をとっている。これは佐賀、唐津、小城の藩札は旧厳原藩田代領、同浜崎領内においても上納金として使  
えるが、田代札、浜崎札は、旧佐賀藩、唐津藩、小城藩領域内では公納金としては使用できないというものであつ  
た。のち、田代札、浜崎札も比価が定まるので、公納金として用いられるようになるが、政府はこのように藩札に  
ついては詳細な運用を定めていた。

以上のように藩札の交換が行われたが、この交換によって佐賀藩札は発行額のどの程度が回収されたかについて  
検討しておこう。

表15は銀札の回収状況を示したものである。製造高四万三五千五貫のうち、一五〇五貫は旧県中に引き換えられ、  
また一五五貫も回収されて、これらは紙幣寮掛員の立合の下で焼き捨てられている。それゆえ、四万一九三四貫が  
流通高となっている。このうち、一万一二三九貫が石代納金、雑税、官有物払下げ代金として銀札で上納されてい  
る。流通銀札のうち約二五％は諸上納物として銀札で回収されている。新札との交換高は一万五六三九貫で約二六  
％の交換が行われている。また、押印高は一万一二三八貫でこれは銀札の二五％である。銀札のうち約五〇％の回  
収と押印が此度の交換によってなされている。

表16は金札についての交換状況である。製造高五万三千六九四両のうち、一四万四五百五貫が旧県の中に回収  
され、二万五千〇〇両が貸付金の返納などで上納されている。約三〇％は交換開始前に処理されている。それゆえ  
流通高は三八万三千八〇八両である。このうち二〇万七八〇八両が石代納などによって金札で回収されており、流通  
高の約五四％はこれによって回収されている。尅朱、二朱の小額銀札の押印高は一万一四〇二両である。交換高は

明治初期の肥前地域における藩札整理状況

表15 旧佐賀藩製造銀札派出官員江差出候仕証書（銀札）

<p>1. 銀札43,555貫522匁 3 分 此金641,110兩 2 分永122文 内 銀札1,505貫972匁 8 分 銀札155貫291匁 1 分 残 金札41,934貫258匁 4 分 此新貨560,618円42銭 8 厘 此訳 銀札15,639貫565匁 7 分 銀札11,238貫912匁 2 分 銀札11,239貫692匁 銀札203貫808匁  銀札589貫472匁 内 20匁札216貫920目 15匁札15貫 10匁札130貫900目 8 匁札29貫920目 5 匁札112貫200目 3 匁札33貫294匁 2 匁札33貫660目 1 匁札14貫460目 5 匁札 2 貫618目 小以38,911貫447匁 9 分</p>	<p>製造高  旧県中引換札巡回林小丞立合焼却 準備金之内貸附上り札前同断  流通高  於流出先交換高，但内訳各種略之 同断押印高，但内訳各種略之 諸上納之分，但内訳各種略之 比較表発表前於長崎県取立候分，但内訳各種略之 比較表発表後前同断</p>
<p>流通高と差引 銀札3,022貫810匁 5 分 同此新貨40,411円90銭 5 厘</p>	<p>散失 是ハ交換札其他係上納ノ差分引高面之銀額散札 相成候事</p>

注「官省進達」（明治六年癸酉五月六月分）  
末書分は除いて

表16 旧佐賀藩製造金札派出官員差出候仕訳書

金 額	内 訳
1. 金札553,694兩永62文 5 分 内 金札144,555兩永315文 1 分 金札25,257兩永125文 金札53天永250文 残 金札383,828兩永372文 4 分 此訳 金札207,808兩永187文 5 分 金札11,402兩永62文 5 分 金札184,912兩永937文 5 分 金札20,084兩永750文 内 貳分札16,469兩永500文 壹分札3,248兩 貳朱札357兩永250文 壹朱札10兩 小以金札424,207兩永937文 5 分	製造高  旧県中引換札巡回林小丞基立会焼却 準備金ノ内貸附より札前同断 準備金ノ内上納札前同断  流通高  石代其外上納之分、但内訳各種略之 貳朱壹朱藩札之分交換之分、但内訳各種略之 於派出先交換分、但内訳各種略之 比較表発表前於長崎県上納札取立之分
流通高と差引 金40,379兩永565文 1 分	過剰 是ハ交換札其他諸上納之分差引高之金額 増加相成候事

注「官省進達」(明治六年癸酉自五月六月分)より作成。

朱書の分は除く

一八万四九一二兩で金札流通高の五〇%が交換によつて回収されている<sup>(10)</sup>。  
銀札、金札の回収状況からすれば、石代納金・雜税・官有物払下げで約五〇%が回収されていることは注目すべきであろう。藩札が鋭意この分野において回収されていたことは、石代納の推進を強めた政府の政策が藩札回収でも大きく機能していることを示している。貨幣制度の統一化は、貢租体制の転換によつても裏付けられており、ここに財政制度確立が一連の関連をもちながら進んでいることが窺える。

- 注(1) 「官省進達」明治六年癸酉七月八月分。  
(2) 同右、明治六年癸酉七月八月分。  
(3) 同右、明治六年自十一月到十二月。  
(4) 同。  
(5) 同右、明治七年一月二月分。  
(6) 同右、明治五年自六月到九月。  
(7) 同。  
(8) 「達帳」明治六年一月ヨリ四月迄。  
(9) 同。  
(10) 石代納、押印、交換などの総額は流通高を越えるが、これについては表16を参照。

#### 四 むすびにかえて

藩札と新貨との交換状況について若干考察してきた。佐賀藩札の回収においては、まず損耗度の高かった二朱札と一朱札の新貨との交換が行われた。これは一八七三年に発行された藩札の紙質が良くなく、とりわけ、二朱札と一朱札は流通頻度も高く損耗が進んでいたことによるものであった。この交換業務は旧佐賀藩領域で行われ、交換業務を有力商人が請負った。藩札回収作業において、有力商人層は維新政府の傘下に組み込まれ、維新政府は有力商人層を動員することによって、交換業務の社会的信用を得ることを目論んだ。

藩札と新貨との交換状況については、「佐賀の役」で書類が焼失したために、必ずしも十分な考察ができないが、それでも残存書類からは交換と押印が一八七八年三月一日より同年四月十七日までに行われ、膨大な藩札がこれによって回収されたことが知れる。

五錢未満一厘以上に相当する藩札は押印されたが、その枚数は七九七万枚と膨大な数であった。交換と押印状況については、金額や藩札枚数は知れるが、藩札所持者個別の動きについては目下の所不明である。

藩札は租税、貸付金や不用官物払下代金上納などによっても回収されたが、これらについても綿密なまとめが行われていたことが窺える。

交換と押印業務によつて回収された藩札は発行高の約五〇％であつた。これは交換以前にすでに藩札が回収されていたことや租税上納などに藩札が使用されたことによるもので、藩札は各種の方法で回収されたことが知れる。